

役場の対人援助論

(47)

岡崎 正明

(広島市)

名前にまつわるエトセトラ

1人にひとつ

家庭児童相談の仕事をしていると、おのずと人の「名前」というものにたくさん出くわすことになる。子どもはもとより、親、祖父母やきょうだい、学校や保育園などの関係者。正直名前を覚えるのがあまり得意ではない私は、苦勞することも多い。最近には特に、顔が出てきても名前が出てこない症状が目立ってきて、職場のベテランと一緒に「加齢あるある」をボヤいている。

ゴダイゴの名曲「ビューティフルネーム」の中で『名前 それは 燃える生命（いのち） ひとつの地球に 1人ずつひとつ』と歌われているように、世界中のどんな所に住んでいようと、金持ちでも貧乏でも、健康でも病弱でも、名前だけはみんな1つ持っている。それは変わらない事実だろう。あの国の独裁者も、虐待で顔を腫らしたこの子も、炎上商法のユーチューバーも、野球界のスターも。みんな生まれてきたとき誰かに祝福され、願いを込めて名付けられた存在だ。様々な不条理や困難に置かれる子どもたちと関わっていると、その不変性や公平性は、私には救いのように思えることがある。

年齢や性別、流行り廃りに関わらず、どんな人の名前にも多かれ少なかれの由来や物語がある。それもまた、例外なく万国共通だと思う。どんなに高尚な意味があろうが、好きなアイドルからつけた軽いノリだろうが関係ない。そこには命名者の意図や想いが間違いなく存在している。

個人的にはどうやっても読めない、学校の先生泣かせの当て字や、明らかにアニメキャラの名前から付けたもの、おそらく親は車が好きなんだな～と感じる車名シリーズのきょうだいにも出くわし、「私ならしないな…」とは思ったりしたが、そんなことは余計なお世話である。価値観は人それぞれで、いろんな人がいるから、いろんな名前があっ

て面白いともいえる。

私自身「命名」とは、男親でもできる数少ない子どもの誕生に寄与する仕事と思い、アレコレ考えて結構な思い入れを込めたと記憶している。ただ最近は、あまり親が自分の思いを乗せすぎるのも、ありがた迷惑かもしれないな…とったり。まあ大事なのは、本人や家族がその名前を少なくとも呪わずに済み、できれば肯定的に受け止められれば、それで御の字ではないかと思う。

家族を理解するための面接の定番に「名付けのことを聴く」という手法がある。これは別にキラキラネームだからだとか、変わった名前だから親のセンスを知りたい…ということではない（もちろんそれもアセスメントの材料にはなるが）。対人援助の支援者がより興味を持つのは、名前そのもの以上に、その命名プロセスだ。

生まれた子どもの名前を、どのようにして決めたのか。誰が案を出し、誰と誰が相談し、最終的な決定を誰がどうしたのか。そこには家族の普段からの役割やパターン、力関係など、その家族の特徴がよく現れる。「支配的な父がトップダウンで決めた」「母が昔からあたためていた名前を付けた」「親族が画数にこだわった」など、家族の選択は様々だ。

ちなみに我が家の場合は私がいくつか候補を出し、妻の審査に通ったものを最終的に話し合っで決めた。漢字の持つ意味を重視し、画数はいろんな流派で言うことが違うので、途中で考えるのをやめたのだった。

もちろんそのプロセスややり方に正解はなく、家族がそれでうまくいくのであればどんな形でも構わない。しかし問題を抱えている家族というのは、そのプロセスに「一般的」や「多数派」とかけ離れた「え？そんなやり方？」「それはあまり聞かないな」という部分があったりする。支援者側がそう感じる感覚は結構大切で、実はそのあたりに家族の歪みや無理が現れていたり、誰かにシワ寄せがいつている痕跡が見つかることがある。だから若い人たちには、「え？」と感じたら放置せず、できるだけその詳細や理由を突き止める努力をお勧めしている。

エピソード①

利幸と美奈は同居しているが入籍していない、30代後半のカップルだった。利幸は妻と随分前から別居し、ほとんど連絡もとっていなかったが、相手の反対もあって離婚が成立していなかった。美奈は利幸と婚姻することを強く望んでおり、何度も離婚を迫っていたが、利幸はその度に「もうすぐ妻と正式に話し合う」「来月には裁判所に手続きに行く」と言って、かれこれ2年以上が経っていた。美奈はもともと気分障害などで精神科通院していたが、利幸と交際が始まってからは、その関係性が病状に大きく影響し、利幸と喧嘩になるたびに症状が悪化していた。

そんな中美奈が妊娠。彼女は産むことを希望し、さらに強く利幸に離婚を迫ったが、利幸は相変わらず口約束はするものの、手続きは前に進まなかった。美奈は煮え切らない利幸に対し「出産までに入籍したい」「でなければ赤ちゃんは施設に預ける」「お腹の子と心中してやる」などと述べ、話し合いがこじれると暴力に発展したり、希死念慮が高まるなど、不安定な状況が続いた。美奈からは支援者に対して利幸への不満や、婚姻できないことへの不安が度々聞かれたが、お腹の子への心配や想いが語られることは少

なかった。支援者側は入籍問題については 2 人で冷静に話し合うことを促して距離を取り、病状や妊娠へのフォロー、出産後のサポートなどに関わる姿勢を維持した。

予定日より少し前に無事赤ちゃんは生まれた。年の瀬が迫る頃生まれたその女の子は「利結奈（りゆな）」と名付けられた。「『利』幸と美『奈』が結ばれる」との意味から名付けたのは、美奈の意向が強いようだった。結局 2 人の結婚は出産には間に合わなかったものの、妊娠中に利幸と妻との離婚裁判がようやく進展し、利結奈が 1 歳になる前に 2 人は入籍した。

しかしその後も美奈が利幸への不満や不安を訴えて病状が不安定になることは続いていた。利結奈の養育は、ヘルパーや保育園の利用で支援し、少しずつ美奈が子どもに向き合い、安定して関われる時間を増やしていった。

「親として子どもに向き合う」「親としての意識や気持ちを醸成する」などのいわゆる親の準備性というものは、誰もが均等に持ち合わせるものではない。中にはパートナーとの関係や、自らの課題という荒波にアップアップで、それどころではない人もいる。そんな現実を感じたケースだった。

エピソード②

高 3 の恵子が妊娠した。中絶できる時期を過ぎて妊娠が発覚。お腹の子の心当たりを父母から聞かれ、恵子は SNS で知り合った男性と 1 度だけ性交渉があったと語り、その後連絡はつかないとのことだった。「頼まれて断れなかった…」と語る恵子は、軽度の知的障害があった。元々生理不順で、性的な知識も希薄だったことが相談を遅らせてしまった。両親は恥を外に出したくないと、親戚にも学校にも秘密にしたいと述べ、家庭の事情を理由に恵子を退学させた。

恵子の両親は生まれてくる子の養育はできないと述べ、里子に出したい意向を示した。恵子は言葉少なく、両親に追随した。その後何度か話し合いの場を持ったが、恵子と両親の意向は変わらなかった。「戸籍にも載せたくないくらい」「もし施設に入ったとしても、面会はできない」などと両親は述べ、恵子もうなずいた。特別養子縁組前提での里親委託を検討することとなった。

しかし妊婦検診でお腹の子には肺に重大な疾患があることが判明。出産後すぐに難しい手術をしなければ命の危険があると病院側が説明すると、恵子の両親は疾患のために里親が見つからない事態になることを不安視し、「治療せずそっとしておけないのか」「手術に同意しなければどうなるのか」「絶対家には連れて帰れない」と述べ始めたため、支援者側はその対応に奔走することとなった。

恵子と両親に対し、法律などを根拠に、合理的に適切な治療をするべきことを繰り返して述べ、手術への同意と治療への協力を促した。最後まで渋りながらも、病院や児相の説得により恵子と両親は手術に同意。赤ちゃんは出生後すぐに数時間かかる大手術を乗り切り、なんとか NICU に入った。

数日後、恵子の父から連絡があった。出生手続きを済ませたとの報告だった。「みなさ

んが『法律ですから』と繰り返しいわれたので、法子にしました」と、まるで天気の話でもする調子でその命名理由を語った。

法子の病状はその後安定せず、一進一退が続いた。家族は病院から要請された面会や手続きには応じていたが、恵子は就職活動優先のため、対応はもっぱら父母だった。結局 1 歳になる前に、法子は施設にも里親宅にも行くことなく、病院で息を引き取った。

支援者は時に、抗えないものの前にその無力さを思い知ることがある。それは分かっているはずだが、かといって慣れるものでもないし、慣れてもいけないことだと思っている。法子に対する家族との温度差や違和感は最後まで続き、心の中の霧はいまだ晴れない。それでも私たちはその時できることを精一杯するしかない。そんな思いでいる。

名前をつけてやる

生きていれば誰しも、何かに名前をつける（命名、ネーミング）場面があるだろう。対象は何も我が子に限ったことではない。ペットやモノ・友人ということもある。幼い頃、お気に入りの人形やおもちゃに自分なりの名前をつけたり、友達にふざけたあだ名を付けた人も結構いるのではないだろうか。その行為は対象への愛情や親近感、時には怒りや腹立ちなど、強い思いがきっかけになることが多い。名付け・名付けられるという行為が、互いの関係を強化したり、これまでと違う段階に引き上げる。そういう効果は確かにある気がする。

また、自分自身に別の名前をつけるということも、ときに人はやったりする。ペンネーム・ラジオネーム・俳号・芸名・源氏名などなど。新たな名前を名乗ることで、人はいつもと違う自分を生きたり、役割を変化させてみたくなるのだろうか。

そういえば昔知り合った人で、自分のことを「天使ちゃん」と名乗る女性がいた。SNSで詐欺の講師をしていた「頂き女子りりちゃん」同様、そのセンスには共感できないが、いずれの名付けにしても、そこには本人の様々な思いや理由が存在する。「願い」や「希望」が強いこともあれば、「呼びやすさ」や「字の好み」「音の響き」「他と区別するための分かりやすさ」などが重要なこともあるだろう。1 つの名前がひとつの理由だけで決まるとも限らない。

個人的なことだが息子が「こども落語」なるものを習っており、月 1 回アマチュア落語家が講師となり、市内の公民館で稽古をつけてくれ、年に 1 度発表する会もある。ここでは息子は本名ではなく、落語をする時の名前、いわゆる「高座名」というもので活動している。「〇〇亭××」とか「〇〇家××」といった落語家らしい名前を、参加する子どもたちがそれぞれ思い思いにつけている。

互いの本名も知らず、住んでいる地域もバラバラな彼らは高座名で呼び合い、和気あいあいとやっている。たまに保護者が本名で子どもを呼ぶと、なんだかピンとこない感じすらある。とても小さな世界だが、その場では子どもたちはみな高座名の自分を生き、互いにそれがしっくりくる関係性ができている。横で見ている私からすれば大変面白味深い。子どもたちにとって高座名は、いつもの自分から飛び出して、こども落語の一員になるスイッチになっているようで、そのあり様はとても自由で豊かに見える。

思えば昔の武士階級は子どもの頃は幼名で呼ばれ、成長したら元服して正式な大人の

名前をつけていた。新たな名前を名乗ることで、大人としての自分に生まれ変わるというか、その自覚を促す効果もあったのかもしれない。そう考えると現代の私たちは、いつ大人になったと言えるのだろうか。どんどん分かりにくく、曖昧になってきている気がする。成人式は相変わらず 20 歳だが、民法上は 18 歳成人になった。しかし最近では自立する年齢があがっている感じだし、精神年齢も若い若者が多いような。かくいう私も 25 歳頃までフラフラしていたし、30 歳になったときも「自分が大人か？」と言われると、頭の中は中学時代とあまり変わり映えしないような気がしていた。

この際我々も 20 歳とか結婚出産あたりを機に、大人の名前に改名するようにしてはどうか？などと、半分本気で思ったりもしてしまう。

名前≡呼称ととらえると、仕事上では役職や職種で呼ばれることも多くの人を経験することだろう。「社長」「課長」「店長」「看護師さん」「先生」「アルバイトさん」などなど。これもプライベートな自分とは違う世界を生きる時の名前だろうが、なんだか少し窮屈で不自由な感じがするのは、私だけではないのではないか。その理由はおそらく「役割」に偏った呼び名であることや、世の中や組織という顔の見えない何かにつけられた名前だからなのかもしれない。

逆に命名プロセスに自らが参加できたり、顔の見える信頼できる相手による命名によって、名前をつけることの効果を最大限引き出しているのが、家族療法の外在化や、当事者研究での自己病名だったりするのだろう。どちらも名付けることによってそれまでの固定概念を揺るがし、変化をもたらす力をもっており、個人的にもとても好きな手法だ。

そんな私は、3 月まで「課長さん」と呼んでいた人を、4 月になったら退職再雇用で急に「〇〇さん」と呼び始める慣習がどうにもしっくり感じないため、自分は普段からさん付けで呼んでもらえるよう、職場の人をお願いしていたりする。

石垣りんの「表札」みたいというのは、ほめ過ぎだろうか。

※ エピソードは作者の経験を基に、個人情報保護のため内容を改変・創作し、登場人物も勝手に命名したものです。